

車社会と向きあうために

尾道市立御調中学校 三年 天満 詩

TVで一人の男性が声を絞り出すようにして話していた。交通事故により亡くなった奥さんと娘さんへの想いを下を向いて、何度も声を詰まらせながら必死に話していた。私はトイレに行くためにリビングを横切っていたが、目が離せなくなり、立ち尽してTVを見ていた。大切な家族、いつもの日常、当たり前にあったものを一瞬で奪われた悲しき、苦しみ、やるせなさ、加害者に対する怒り。色々な感情が画面からあふれていた。胸が苦しくてたまらなかった。

何年前、近所の方が交通事故で亡くなったことを思い出した。夜道を歩いているところに、車が突っ込んできたということだった。車の運転手はスマートフォンを操作しながら運転していたらしい。亡くなった方はいいお父さんで、皆に慕われ、にっこりとした笑顔が印象的な方だった。事故の知らせを聞いた父は真っ青な顔をして、母と話をしていた。つい最近も話をしたばかりで、信じられない、信じられないと何度も話していたのを覚えている。葬儀に参列した父は当分元気を無くしていた。残された家族の方を思い落ち込んでいた。

現代は車社会で、私が住む御調町は、特に公共交通機関が少なく、車がないと暮らすことは難しい。父も母も祖父も祖母も毎日運転している。私も時期がくれば運転免許を取り、毎日運転をするのだろう。でも怖くなった。私は加害者になることはないのだろうか。こんな風に誰かの人生を奪い、誰かの笑顔を奪うことはないのだろうか。葬儀に参列した両親から、加害者の様子も聞いていた。一人では歩くことも出来ず、誰かに抱きかかえられながら、今にも倒れそうにお悔みに来られていたことを。まだ頼りない若者で、その姿に私を重ねてしまったと。その方は一瞬の油断、気のゆるみ、自分の甘さで大切な命を奪ったことを、一生抱えながら生きていかれるのだろうか。これから長く続く人生の中で、何度も後悔しながら、苦しみながら生きていかれるのだろうか。私だったら、とても耐えられないかもしれない。人前に出ることもできず、家に引きこもってしまいかもしれない。人の命を奪った自分を許せず、もしかしたら自分の命を粗末にしてしまうかもしれない。交通事故は被害者の一生を奪うだけでなく、加害者の一生をも奪うことになるのだ。

TVの男性はこうも言っていた。「少しでも運転に不安があるときには運転をしないで欲しい。」と。体調不良や年をとることによる判断力の低下、お酒を飲んだ時、スマートフォン等に気を取られること。どれも自分が気をつけることで防げることだと思う。一番怖いのは慣れだ。気軽に車を運転する環境にあるからこそ、一回一回車に乗り込む時、シートベルトを着ける時に「今日も気をつけて運転しよう。」と思わなくてはならないと思う。車という便利なもの、日常に欠かせないものが、ある日人の命を奪うものになることを胸に刻み生活していこうと思う。あの時の男性の真剣な、必死な目を思い出しながら。